



図248 遺跡の位置
5万分1地形図「弥彦」

大藪遺跡 西区赤塚

佐潟の南に接する砂丘の東端に立地し、現在の海岸線から約三キロメートル内陸に位置する。範囲は、砂丘が東端に舌状に張り出した全域で、東西三五〇メートル、南北二〇〇メートルほどである。標高は六〜八メートル、三方に広がる水田は標高約四メートルである。宝篋印塔などの残骸が残り、寺院があったという伝承があることから、古くから遺跡として知られていた。平成元(一九八九)

年、新潟市が市史編さん調査の一環で一部を発掘調査し、平安時代と中世の二時期の遺跡と分かった。中世の様子を紹介する。

遺跡には、「義清の塚」・「砂利塚」という二つの塚があり、そこに崩れた宝篋印塔・五輪塔(ごりんとう)が集められている。これらの石塔の時期は、室町時代から近世初頭と見られる。また、かつて畑の耕作などで、和鏡、懸仏(かけほとけ)、壺(つぼ)に入れられた中国銭などが発見されてる。和鏡は、鎌倉〜南北朝期のもの。懸仏は完全なものはないが、室町時代ごろのものとして推定される。



図249 大藪遺跡

発掘調査では、十二世紀末から十六世紀末までの遺物が出土した。遺物の中には中国産の黄



図250 「義清の塚」 中央に宝篋印塔の相輪が見える

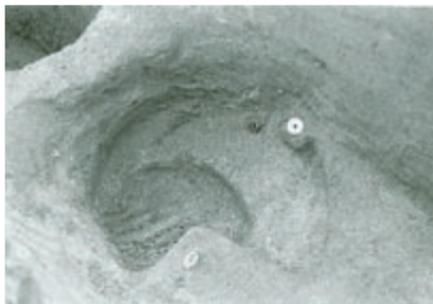


図251 墓穴群の一部 銭貨が見える

釉鉄絵盤・白磁四耳壺、瀬戸焼・美濃焼の仏花器・香炉・天目茶碗など、高級陶磁器や仏具などがあつた。明確な遺構は、墓穴群と土坑であつた。墓穴群は、直径三三センチメートルほどの垂直の穴が密集したもので、穴の中には焼けた中国銭があつた。一部の穴の壁に、曲物の断片が付着していた。周辺から、焼けた骨や中国銭が多く見つかったことから、火葬骨と銭を曲物に入れ、地中に埋めることが繰り返された場所であると判断された。土坑は、長軸が一・五メートルほどの長方形で、地面を垂直に掘り込んだもので、底が平らであつた。丁寧な掘り方で、遺物がほとんどないことから、ごみ穴などではなく、墓穴の可能性が高いと推定された。

土葬の遺構かもしれない。

発掘調査では、寺院の跡は見つからなかったが、墓域が発見された。時期は不明であるが、中世には火葬がすでに行われ、死者に銭を持たせる風習が始まっていたことが分かった。遺跡に残る石塔の残骸は、有力者が墓塔・供養塔として立てたのであろう。